



TITLE:

<大會抄録>唐代京兆府の戸口動態：
敦博地誌殘卷を手掛かりとして

AUTHOR(S):

愛宕, 元

CITATION:

愛宕, 元. <大會抄録>唐代京兆府の戸口動態：敦博地誌殘卷を手掛かりとして. 東洋史研究 1984, 43(3): 569-569

ISSUE DATE:

1984-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153956>

RIGHT:

意味するものを考え、蘇州普濟堂等の實際の變遷をおうことによつて「善舉」の徭役化がいかなる結果をもたらすのか考え、前近代中國の國家と「福祉」あるいは公共事業とのかわりについて考えてみたい。

唐代京兆府の戸口動態

——敦博地誌殘卷を手掛りとして——

愛宕 元

近年、その具體的内容が明らかにされた敦煌所出の天寶初年書寫と目せられる「地誌殘卷」は、隴右・關内・河東・淮南・嶺南五道の一三八府州、六一四縣が記され、各縣ごとに管下の郷數が擧げられている。百戸を一里、五里(五百戸)を一郷とする唐代郷里制は、後半期における逃亡戸の激増などで九世紀になると大幅に戸數を縮少して再編される。京兆府に關しては、『長安志』、『太平寰宇記』等に唐代の畿内各縣郷數を記すが、いずれも縮少再編後のものである。それに對して、この「地誌殘卷」に記す郷數は、その書寫時期が天寶初年であることから、唐代戸口統計上のピーク時のものと見なすことができる。京兆府管下二十三縣の郷數について、この「地誌殘卷」所掲郷數と『長安志』・『太平寰宇記』所載のそれとを比較してみると、全國一般的な減少傾向が明らかに認められるとともに、例外的に郷數が増加している二、三の縣が存在する。その因として、特定縣への帝陵の集中とその護持のためのすぐれて政治的配

慮に基づく郷の移管という事實、また行在所として特異な發展を示す縣城都市の存在などが考えられる。このことは、京兆府管下縣の特殊な立地を反映する一方で、縣城ないし州城が都市として繁榮した場合の郊區鄉村域へのある種の波及効果とでも言うべき現象と見なすことができる。

また一縣だけは、郷數の異常に高い減少率を示すことが知れる。この地域の渠水について詳しく検討してみると、多數の碾磑による不法取水、上流地區の不法な渠水先取、さらには取水口たる斗門を獨占的に利用する大土地所有の形成など、農田水利上の大きな不利益が郷數減、すなわち戸口減の一因として浮び上ってくる。唐代後半期における京兆府管下縣の郷數増減から、この時期の鄉村社會の一端を考えてみたい。

秦檜權力の構成と限界

寺 地 邊

宋金和議關係の確立した紹興十二年から二十五年冬(秦檜の死)までの十四年間は秦檜專制期として規定できる。秦檜はこの間、諸政治勢力との連合・融和を拒否し、獨裁權力の道をひたすら歩んだ。秦檜專制權力とは最終的には次の四本の支柱より構成されていた。①在京官僚群においては臺諫および侍從——六部尚書・侍郎層、②皇帝周邊層——皇后・宦官・侍醫、③行在・江南諸都市の特